ひとを育てる活動

子どもの教育と学校の運営を支えていくために
先住民族学校/ILS アニータ先生の考える将来

５月の終わり、ILSティヌオス校で２年間の教育課程を終えた卒園児の写真が届きました。晴れて小学校入学の資格を得た16名ですが、一番近い公立小学校でも３kmほどあり、父母からは引き続きILS校で学べないかという声があると聞いています。通えない距離ではないけれど確かに雨季の山道通学は年少児に危険です。

アグロフォレストリー事業でアニータ先生と出会った2014年度のILS校には小学校１、２年のクラスがありましたが、児童や教師数の増加で給与支払いが困難となったのか、学校支援で再び協働することになった2019年にはすでにその低学年クラスはなくなっていました。

現時点で、教室などスペース面では、１、２年生、できれば３年生までという父母の要望に応えられそうですが、問題は教師給与財源の確保です。

会員の協力により開始した豚、アヒル、ヤギの繁殖事業と、バナナやアバカなどの学校農園での換金作物栽培拡大のほか、何よりも重要なのは、少額であっても授業料を支払うという父母の覚悟や協力です。

アニータ先生からは、安定した地元市場がある竹細工技術をより多くの父母に広める技術研修実施の話も聞きました。このティヌオスに隣接のトゥコブロールでも発足した女性組合の活動も、母親の現金収入の増加、授業料を負担する能力の向上に大きく貢献すると期待しています。

SCMSI ラヒット校からも卒園式の写真届きました

約 60 年にわたるサンタクルスミッション/SCM による初等教育普及事業。公立校が増えることで順次その役割を終えて、今は町中心部のレムエヘックとラヒット湖岸に各１校、計２校が、チボリの民族文化継承を正課とする私立として幼稚園生と１－６年生の初等教育を支えています。

マスク着用、間隔をあけるなど、写真で見るコロナ対策でもその違いが分かるように、ラヒット校は ILS 校ほど辺境ではありませんが、公立が遠いことから私学 SCM 校存続の要望が強いと聞きました。

辺境ビラーンの初等教育を支えるナブル・カマガヤ小
今年も 39 名が巣立ちました

「ナブル小の卒業式に行ってきました！」７月初めに CMIP 事務局のチャリスから届いた各種写真。11 年前に ICECk（鎌ヶ谷国際文化交流会）の資金協力でその創設を支援した校舎は、屋根も壁も経年変化はあるものの HANDS や KAMAGAYA の文字ははっきり読み取れます。過去２回の訪問で私たちも体験しましたが、蛇行する河川に橋はなく、10 数回徒歩で渡り、さらに山道を数時間歩くという辺境にあるビラーンの村ナブル。貴重な初等教育の拠点として児童数が増加、今年も 39 名が卒業しました。

このナブル校は、新卒のカレッジ奨学生が最低限の給与を受けながら、国家試験/LET に向けて教育実習に励む場でもあり、今年も１年間の勤務を終えたニンノが LET に挑戦することになりました。これまで同様、初回挑戦時のみという条件で、予備校経費などを補助の予定です。

＜　その他 CMIP 経由の教育支援短信　＞

＊　医師を目指すジェニーはこの７月に無事ダバオの医大を卒業、インターンとしてパナイ島の病院勤務が決まりました。ビラーン人医師育成の長い道のりもゴールが見えてきました。

＊　今年度カレッジ奨学生の卒業は１名。英語専攻で教師志望のジェーンです。国家試験に臨むニンノにかわり、これから１年間ナブル小でボランティア教師を務める予定です。

あしなが奨学生近況報告

前号で、ジュネッフェ１名の支援に限定することをお伝えした「あしなが奨学生」。その109号編集後に、現地窓口のボルール住民組合/TBAから、10年ほど前に当団体ハイスクール奨学生だったアルマ(写真)について、追加支援の打診がありました。

家庭の事情で中退、結婚。その後、学業を再開し、今はカレッジ(教育学部２年)に通いながらシングルマザーとして３人の子どもを育てているアルマ。今回諸事情で学費が続かなくなり、元奨学生仲間のボニファシオを通じて支援を求めてきたケースです。元FOT会員によるあしなが奨学金は、ブラクール支援終了後の今も、4名の方から継続して協力いただいています。

この４名による原資はジュネッフェ１人分を上回るため、アルマには、ジュネッフェの６割程度、月額2000ﾍﾟｿでよければと、支援要請を受け入れました。ジュネッフェとアルマ、ともに30代の２人ですが、初志貫徹で卒業まで頑張ってほしいと思います。(写真　アルマ)